押韻法から検討した『楚辞』九辯篇の成立時期

野田，雄史
九州大学大学院博士後期課程

https://doi.org/10.15017/9643
押韻法から検討した楚辭九辯篇の成立時期

はじめに

現行本楚辭に収める独遊の内、騒動や九章等が屈原の作と伝えられてきたに対し、九辯は宋玉の作とされてい
る。この伝説の真偽はさておき、九辯が騒動や九章等よりも時期的に遅れて成立することとは確かなようである。

筆者は先に拙稿『押韻法から検討した楚辭九辯篇の成立事情』（日本中學會報49-1982）において騒動自作の特徴ある押韻法にについて考察した。そこでは九辯を人として考察する四句語、句末の押韻について考察すると、九辯の句末の押韻は押韻のように、句末の押韻の影響について考えてみるのにあたり、まず九辯の成績を踏まえた上で、九辯の押韻の実態について考察してみたい。

１．九辯の押韻の枠組み

筆者は「押韻法から検討した楚辭九辯篇の成立事情」（前出）で、騒動や九章の押韻を考えてみる上で中古音韻

野田 雄 史
中国文学論集 第二十七号

を使っても差し支えないことを論じたが、その際、それらの押韻に

・十六撮の枠組みで考えて、偶数句末での押韻を殆ど読むことができた。
・陰陽・陰入の相配による押韻も殆ど見られない。

という特徴があることを述べた。この三節は、九辻においてはどうなっているだろうか。九辻全十章の偶数句末で

押韻の枠組みに関してもは、今はここまでの言及に止め、次に押韻法について見てみたい。

2. 九辻第一章の句の構造

離騏での調査に比べると撮に声調も一致する比率が格段に増えている。声調が異なる場合に母音韻尾・子音韻尾・鼻音韻尾の枠組みを越えて

押韻し合うということは一切ない。この離騏との相違点を、もし有意味なものとすると、十分に中古音の音

系に近かった離騏よりも、九辻では更に中古音に近くなっている（結論付けることができよう。また、詩経を中

心とした上古音研究の成果から見ると、両者は十分に類似しており、いずれも同じ音韻的背景のもとに成立したと

想定される。

— 2 —
える句形の種類と、押韻の特殊技法・成立時期等について概観しておこう。句形の分類は竹治貞夫氏の『楚辭研究』

九歌型

九歌に用いられる句形。

（風間書房）に定義されている以下の類型を使用する。

九章の楚辭篇がこの形を差し挟んでいる。

橋頭型

九章の橋頭篇に用いられる句形。

橋頭篇の本文の他、涉江篇・抽思篇（B）・懷沙篇の乱にも用いられる。

離騷型

・九章諸篇の成立時期に関しては岡村繁氏の『楚辭と屈原』（日本中国學會報18-1988）及び『楚辭展』（楚辭展研究）の位置（集刊東洋学16-1598）で推定されている。

他、拙稿『押韻法から検討した『楚辭』』九章篇の成立時期（野田）

押韻法から検討した『楚辭』。九章篇の成立時期（野田）

この拙稿で掲示した表を再度載せておく。
<table>
<thead>
<tr>
<th>時期</th>
<th>連続韻</th>
<th>橋顥類型</th>
<th>悲回風</th>
<th>懐往日</th>
<th>橋顥</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>3</td>
<td>4</td>
<td>B</td>
<td>A</td>
<td>慎往日</td>
<td>懐往日</td>
</tr>
<tr>
<td>4</td>
<td>C</td>
<td>A</td>
<td>2</td>
<td>1</td>
<td>1</td>
</tr>
<tr>
<td>4</td>
<td>C</td>
<td>B</td>
<td>A</td>
<td>懐往日</td>
<td>懐往日</td>
</tr>
<tr>
<td>3</td>
<td>A</td>
<td>慎往日</td>
<td>A</td>
<td>2</td>
<td>1</td>
</tr>
<tr>
<td>2</td>
<td>慎往日</td>
<td>懐往日</td>
<td>懐往日</td>
<td>1</td>
<td>1</td>
</tr>
<tr>
<td>1</td>
<td>1</td>
<td>1</td>
<td>1</td>
<td>1</td>
<td>1</td>
</tr>
</tbody>
</table>

這些離騷・九章諸篇的句形を念頭に置いた上で九辻を見てみると、いささか違和感を覚えるのを禁じ得ない。

楚辭の文様的な特徴は「兮」字であると一般に言われている。九辻にも確かに「兮」字は使われているが、少し趣

離騷と似た句から見てみよう。次に挙げるのは第五章の冒頭四句である。

「3字＋虚詞＋2字（十分）」という、最も典型的なスタイルである。例えば離騷篇の次の如くに、それは楚辭
これは離騷の35・36句目である。この基本パターンは、決して多くならないにせよ、離騷本文のあらこちらに見られるし、その他の句も、多少基本パターンの出るところがある。九箇を経るパターンである。このパターンによらないものとしては、第三章・第四章・第六章・第七章・第八章・第九章・第十章は、いずれもこのパターンである。このパターンによらないものは、九箇の中の第十二句に見えるパターンである。第二章は全編九歌型の句である。しかし、これもまた、九箇の中には九歌型の「兮」字の位置によるものがある。
これは、九章第十一篇の東皇太一の冒頭四句である。このように、「三字＋虚詞＋2字」を最も典型的なスタイルと
するのが九歌型である。これは、先に述べた「三字＋虚詞＋2字（＋兮）」という九歌型のパターンと呼応する。

これが第一章の5・6句である。「三字＋兮＋2字・虚詞＋2字」である。5句目では、先に見た九章の句のように、
一句中の上寄りに「兮」字が出てくる。「三字＋兮＋2字」であって、ちょっと字数を半分にした具合である。するとこれは、言葉が懐沙
型のだろうか？しかし、この形が懐沙篇ではこの一箇所にしか現れないのにに対して、九章第一章では都合八句
も出てくる。（第一章・第二句の句切りを変えなかったら九章）これを1・11句で見てみよう。
宗廖兮收濬而水清
憐姨增歎兮薄寒之中人

(句の最初の数字は句番号）

九瓣の押韻の枠組みで「無韻」に勘定した内の一例である。

n韻尾とn+1語尾の押韻は九瓣の他の箇所には見えないので、九瓣

七・八と１１句末の人・新・懐がいずれも科

（句番号の前を付した句がここで問題にしている「上寄りの分」)
5・11句で構成される中間の七句は、7・8・11という押韻をするとは勿論、5・6・9・10という押韻をした気分が悲壮感を盛り上げているのである。そして、その盛り上がりは「痛快だっvido私自負」という11句のみで切迫し、結びの「分」を叫んでおきながら、何と言うことなく「面」と結ばねばならないと、ここに普通の離騷型の偶数句末韻でまとめられ、12・19句とは逆に気分がらくだ、ということが原筆者の気分であること、ということは、この「分」と「面」の間は、やや半脱落だがではなく、最初は「痛快だっvido私自負」という11句目で静かに心寒く、遠い道のりを行くかのように、山に登り水に臨んで、帰ろうとするものを送る。

押韻法から検討した『楚辭』九辻篇の成立時期（野田）
九辯第一章の位置付け

前章譯に見るように、九辯第一章は「上寄りの分」、という独特の句形としつつ、ごく巧に舗録する変則的な押韻法とを用

い、主人公の悲壮感を演出しているのだが、この第一章は九辨全體の中でどのような役割を果たしているのだろう

うか。筆者は前章で、騒騒・九辨諸篇の句形から見ると九辨の句形は「いささか違和感を覚える」と書いた。だが、

それは、よくよく見れば全十章の内、僅か一章のことであり、全體としてはそろそろ騒騒気味は異なるわけではない。い

や、まさに九辨そのままの世界が展開されているものである。渉江篇さながらに騒騒型に九歌型の句を挟み込んだ第

— 10 —
五章 橋頭篇のように別の句型で統一された第二章。そして、離騒型のパターンを踏んで作られているその他の諸篇 第二章から第十章まで、併せて九章。これが、九章諸篇と数も含めて似ているのはどういうことなのかだろうか？

九章は九章に対するオマージュある作品に対応する傾倒の結果その技法や構成を借りて作り出される二次作品として作られたのではないだろうか。というか、筆者が推測する。

離騒の体に踏って反離騒を作ったように。九章の作者も九章を自らの手で再現しようとしたのではないだろうか。それを同じ九章の枠組みに入れたために。「離騒」と名付けたのも我々のせい。九章の第二章に九章・離騒の押韻技法が用いられていたと考えられるからである。それより後に第一章を作り技術が生まれるとな
中国文学論集
第二十七号

考えていく。第一章は第二、第三章に先駆けて成立したと考えた方がよい。また、既に「九辺」として成立して
るものに、後から余人が確かえる理由もなく自作を差し挟む、というのを考えにくい。例えば、これが「九辺」とい
う名なのに八篇しか詩が残ってない、という事情でもあれば別である。しかし、事実は第一章を入れて十篇になる
する。 wohl (2) や (4) か、ということになるが、筆者はそれをどちらかに決するだけの材料を今持たない。
ただ、いずれにせよ「九辺」のオマージュとして作られた「九辺」の巻頭を飾るためには、その作者は楚辭の伝統を受け
継ぐ作者であると周知されていたことから、「九辺全
体の懸念を胸に描いたものと思われるのである。

4. 九辺のその他の詩の押韻技法

前章では、第一章以外の九辺諸篇には離騷・九辺の伝統を受け継ぎた押韻技法がある。しかし、事実は第一章
で、そのままではないが、ちょっと変わった押韻法があるにあって、第六章にそれは現れる。

△：相撲

〇：力碎り

獨歴先聖之遺教
處濁世而顯榮兮

執掌先聖之遺教
處濁世而顯榮兮
非余心之所樂
與其無義而有名兮
寧窮處而守高

2 句目は先に無韻とした内の一つであり、押韻しない。そのため、4 句目と8 句めとが押韻する。「隔四句韻」である。『隔四句韻』で
まるで奇数句末韻と偶数句末韻の交錯が持つような気分を得るようである。
他の押韻の特徴としては、第二章の毎句韻がある。これは、通るうる九歌型の句を用いたからそう変わったのであれば、はたまた九歌型という形の持つ本質的な
要求なのかは定かでないが、句形が原因であるのは疑いないところである。
他に、一韻をやや長く使う傾向がないでもないが、九章悲図風篇のそれはのような大規模なものではなく、四句と
か六句とかいった具合であるので取り上げるほどのでもない。
総じて、九辻第二二第十章は、押韻技法上の工夫に乏しいと言えるであろう。

5. 九辻の成立時期

さわ、これまで九辻諸篇の押韻法や句の構造について考察してきたが、それら外見の特徴から、その成立した時
期が少しでも窺えないものだろうか。本稿の最後に、このことについて考えてみたい。

まず、筆者は先に、九辻は九章に対するオマージュではないか、と推測した。
だすると、九章の九篇がひとまとまりのものとしてまとまれ、十分に流布した後に成立したものでなくてはならない。
これは従来の説と矛盾しないし、特に目新しい意見でもない。

次に、押韻の枠組みについて、基本的に離騷・九章のものを継承している。
やや時代的懸隔はあるだろうが、
押韻法から検討した『楚辭』九辻篇の成立時期（野田）
地理的には余り変わらないのではないか。先に「更に中国古音に近くなっている」と言い、「いずれも同じ音韻的背
九辻を押韻面から考察してみると、その結果は実に味気ないものであると言わざるを得ない。九章・離騷で花開いた押韻技法は果して完全に失われてしまったのだろうか。このことについては、他の詩篇との更なる比較考察を含めて、これからの課題として考えていく。

注

（1）なお、同じものを「http://member.nifty.re.jp/zakase/ml.html」で見ることもできる。また、その注1で触れられてある。

（2）九辻の分章は諸説あるが、本稿では通行本の十章の分類に従うこととする。

（3）江有藻「楚辭読」、『音階十書』所収、王力「楚辭読」、『王力文集第六巻』所収、等はその説である。

（4）n最終尾とng最終尾とは同時に押韻位置に現れる例は、ここで問題になっている「梗撮と」が九章新詠篇に例である他、通撮と山撮の例が離騷に例である。これらの解釈については現在のところ保留としたい。また、九章原高分（A）には「梗撮」と「山撮の例が一つあるが、これに関しては「隔四句詠」の存在の可能性を拙稿「楚辭」九章涉江篇の形式について「押韻と朗詠リズムの関係の検討」（中國文學論集25 1986）で指摘している。

（5）第五章の後半から第六章に連続させて、「固」を「同」の間違えとし、その前の句末と押韻させようという意見が傳

押韻法から検討した「楚辭」九辻篇の成立時期（野田）
中 国 文 学 論 集
第 二 十 七 号

（固、當に同に作るべくして、通・從・誦・容韻と叶す。）

舊本此章誤分「倉美申包骨」以下為別章、井誤以同字為固字、既斷語脈、
取不叶韻，又使章數增減不定、今皆

正之。

（舊本是此章誤計「倉美申包骨」以下分可分別章為為，井並以不誤以同字以割為固字

而有。又一方第二章

又無也。）

同者的章「倉美申包骨」的二句は、端を改めて下を起こすものではなくて却って「何時俗」以下

の句が一まとまりを成し、

背縄是化改錯

という表現で始まっているので、例はこれを奉に第六章の冒頭二句を第五章の末尾に編入する、

という論もあるか

（6）

何時俗之工巧兮

背縄是化改錯

という表現で始まっているので、例はこれを奉に第六章の冒頭二句を第五章の末尾に編入する、

という論もあるか